

熊本市から、国道三号線と国鉄鹿児島線を、南へ約二時間走り、永い佐敷トンネルを抜けると、そこが、私たちの町「芦北町」です。その途中、八代市から、国道二一九号線と国鉄肥薩線を、球磨川に沿って、南へ約三十分行くと、瀬戸石ダムです。このダムから、上流の西側も同じ「芦北町」です。全国の町村の中で、町の両端をほぼ平行に、鉄道が通っているところも、珍しいと思います。町の東は球磨川に、西は不知火海に面しています。

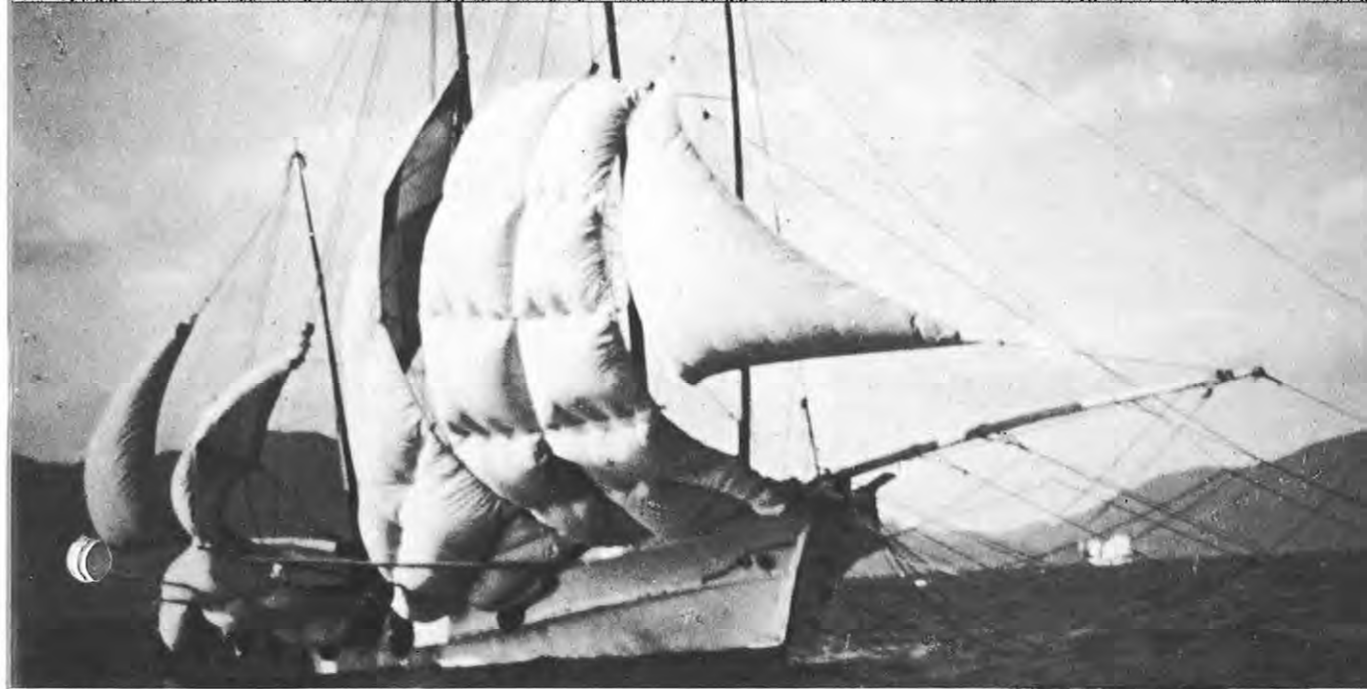
町は北側は、坂本村、八代市、田浦町で、南側は、球磨村、水俣市、津奈木町と、それぞれ隣り合っています。町の南端には、西南戦争の激戦地である大関山（標高九〇二メートル）があり、ここから、佐敷川と湯浦川が、町の西側の大野盆地や佐敷、湯浦の平地を潤し、不知火海に流れています。一方、町の東側は、球磨川の支流の吉尾川や天月川の流域で、山合いの溪流沿いに集落が点在しています。総面積、二百二平方キロのうち、約八割は山地で占められ、住民の生活や文化などに、さまざまな影響を

与えており、人々も、乏しい基盤の中で、絶え間ない努力を積み重ねております。農業では、海岸部に、甘夏みかんを中心の果樹農業があり、平地や山間部は、稲作に加えて、アイリス球根栽培などがあり、山地部になると、養蚕、畜産、酪農など経営形態も多様化しております。甘夏みかんは、生産量全国一の本島の一翼を担い、アイリス球根も、脚光を集めています。林業は、かつては、松の短伐期林業で、北九州の石炭産産を支え、林業家の経済を満たしましたが、時代の流れに押され、今は、すぎ、ひのきなどの用材林や、しいたけ原木のくぬぎ林などで、再生を図っています。西の不知火海を中心とする漁業は、自然条件を生かした打瀬網を初め、沿岸漁業中心でしたが、近年、タイ、ハマチ、真珠などの養殖いかがだが、リアス式の入江に浮かび、水産物の水揚げも、増えることでしょう。

このほか、工鉱業は、古くから、石灰工業が起り、近年は、繊維、雑貨、電子機器などの工場が立地し、食品や木材などの在来の工場とともに、町の経済を潤しております。今、芦北町は、観光の発展に努力しています。町を東西に横断する県道の改良が進み、天草上島と結ぶ、フェリー基地として佐敷港の整備が終わり、雲仙天草と霧島屋久の二つの国立公園をつなぐルートの開発に町民も大きな期待を寄せています。また、県立公園芦北海岸の一角は、国民保養地に指定され、国民年金保養センターをキーポイントとして、海浜レジャーの基地造りが進められています。これは、町内三ヶ所に湧出する、湯浦、吉尾、鶴木山の温泉地に加えて、力強いバックアップです。例年、四月下旬、「おスワさん」で親しまれた、諏訪神社の大祭は、農業の神様として、近郷から信仰を集めて賑わい、また、八月の七夕祭りは、ふるさとの郷愁を誘うほどに定着しております。万葉史蹟野坂の浦や佐敷城跡に代表される本町は、古くから、行政、文化、経済の中心でもあり、県下でただ二校、林業科をもつ芦北農林高校は、その特徴ある校風で、全国各地へ林業マンを輩出してまいります。小中学校は合わせて二十一校、地形的条件に阻害され小規模校の多いことは、過疎町村の悩みです。旧藩時代の学問所、「啓微堂跡」には、町立社会教育センターが設置され、文字どおり社会教育のすべての機能を備え、毎日、利用者の出入りで活況があります。また社会体育も伝統があり、町民体育祭は、本島の草分けで三十年の歴史があります。また、城下町の気風として、弓道、剣道は盛んで、少年剣士の芦北剣誠会は、全国に、その名を馳せています。その他球技なども、老若男女に親しまれ、町立体育館や小中学校体育館を初め、照明施設が完備した、学校の運動場や総合グラウンド、湯浦運動公園などは、夜遅くまで歓声が響きます。

今後、各地の人々とより一層の交流を深め、より豊かな町を目指して、八十年代に向けて、前進し続けることでしょう。

### 自然と人情味あふれる町



▲不知火海の風物詩 打瀬網



写真 (右上) 町立社会教育センター (右下) 特産の甘夏みかん畑 (上) 万葉集の中で野坂の浦を詠んだ長田王の歌碑

